

渡辺拓人（2012年度日本英語学会新人賞受賞）

EL28 巻 1 号に掲載された拙論文 "On the development of the immediate future use of *be about to* in the history of English with special reference to Late Modern English" に対して 2012 年度新人賞を頂きました。執筆に取り組み出した 2010 年夏を振り返ってみますと、当時はただひたすら締め切りに間に合わせようと四苦八苦する毎日で、論文掲載が現実のものになろうとは考えてもいませんでした。ところがそれが掲載され、さらにはこのような賞を頂いたことは、大変な驚きであるのと同時にとても光栄なことです。執筆に際してご助言くださった方々、中でも渡辺秀樹先生、早瀬尚子先生、Jon Clenton 先生、そして 2 名の匿名査読者の方々に、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

本論文では、*be about to* が近接未来を表すように文法化した時代を、*OED* や私家版コーパスを用いて調査し、それが 19 世紀初頭であること、また時を同じくして使用頻度が急増したことを突き止めました。先行研究では十分なデータが示されないまま、近接未来用法の確立が中英語であるとか近代英語であるとか、様々な見解が提示されてきましたが、本論文では実証的な検証を行い、この問題を解決したと考えています。

理論的スタンスからの研究論文が多くを占める *EL* で、記述を中心に据えた本論文がこのように評価されようとは、正直なところ私自身にとっても予想外のことでした。しかし別の角度から考えてみると、通時共時を問わず、英語にも丁寧に記述すべき言語事実がまだたくさんあるということなのかもしれません。今回の受賞が、記述的アプローチからの英語研究の更なる発展に僅かでも繋がればというのが私のささやかな願いです。

言うまでもなく、本論文は私の研究の始まりに過ぎません。これからの研究人生は長く、取り組むべきことは山のようにありますが、今回の受賞を励みに、地道にそして着実に研究を進めていく所存です。